

聞き手の情報処理に対する話者の推測はフランス語接続法の用法にどのような影響を与えるか? —le fait queとPourquoi crois-tu que ...?の後の叙法選択と関連性理論

上智大学博士後期課程言語科学研究科 言語学専攻

lacoupedumonde@gmail.com

井上大輔

1. はじめに

本発表では、コミュニケーション主体は、Speber and Wilson(1995²:270)の「すべての意図明示的刺激は、それ自体の最適な関連性の見込みを伝達する」という関連性の伝達原則に基づいた上で、コミュニケーションを行おうとしており、その上で従来考えられていた言語レベルと談話の主題展開だけでなく、「話し手の想定する聞き手の知識や意識に関わる認知的な要因」(砂川 2005:259)がフランス語の叙法選択に与える影響を、Pourquoi crois-tu que ...?と後置されたle fait queをもとに考えていく。

2. 先行研究

伝統的なフランス語文法では、「主節が否定または疑問でも、従属節が客観的事実である、あるいは話し手がその事実性を認めているときには直説法を用いる(目黒 2000:275)」と考え、従属節が直説法=現実、接続法=非現実を表すと捉える傾向が強い。(1)と(2)はこうした考えで説明できるが、(3)と(4)は従属節の中身が明白に現実であり、上記の説明と矛盾する。

(1) Sa mère ne croit pas qu' il ait (接続法) volé.

彼の母親は彼が盗みを働いたとは思っていない. (=Selon sa mère, il n' a pas volé.)

(2) Sa mère ne croit pas qu' il a (直説法) volé.

彼の母親は彼が盗みを働いたことを信じようとはしない.

(=Il a volé, mais sa mère ne croit pas qu' il a volé.)

(ibid.)

(3) Elle est heureuse que son mari ait (接続法) été promu directeur.

(夫が部長に昇進して彼女は喜んでいる)

(4) Le fait que les stades soient (接続法) utilisés comme lieu d' emprisonnement, d' interrogatoires, est un fait qui date de la guerre, ce n' est pas un fantasme.

(スタジアムが投獄の場所、取り調べの場所として使われていることは戦争時期に遡ることであり、幻想ではない。)

(Perec, Georges, En dialogue avec l' époque, 1979)

そのため、モダリティ研究が進むに連れ、接続法のモダリティは非判断であり、派生的な意味で他の用法が説明できるとする主張が生まれてきた。守田（2015:113）の、“たとえば、vouloir que の中などで使われる接続法は「未実現の事態であるため判断することができない」という意味での非判断として説明される。さらに、文頭の que 節、感情系述語がとる明らかな事実を表す補文節、bien que などの中で使われる接続法については、改めて判断を下す必要がない事象」という意味での非判断とされる”はこうした考えをよく表している。

この場合、(1)は未実現の事態であるため判断することができず接続法が使われているのに対し、(2)は話者が現実であると判断したため直説法が用いられているということになる。それに対し、(3)の場合、従属節は前提¹なので、判断の対象とならず、(4)においても情報構造的な前提を表す位置で接続法が使われていると考えられる。

つまり、接続法のモダリティにはプロトタイプの意味とその拡張²が存在し、プロトタイプの意味は非判断であるが、そこから意味が拡張して意味論的前提や前置された旧情報を表す際にも、やはり接続法が用いられていると考えられる。逆にいえば、真偽判断の対象となる主張や、後置された新情報を表すときは直説法が用いられるということである。

3. Pourquoi crois-tu que …?の用法に関する仮説とその反例

以上見てきた、直説法は新情報を表す場面で使われるが、接続法は前提を表すという説明が正しいとすると、Pourquoi crois-tu que …?の後に来る情報選択について、次のような仮説が成り立つ。コーパスでは、(7)と(8)のようにこの仮説に当てはまる例が見つかるが、(9)や(10)のように反例も見つかる。

■仮説

(5) Pourquoi crois-tu qu’ il est (直説法) parti ? (P が主張、P に焦点)

=Pourquoi as-tu cette opinion ? (彼が出発したと思うのはどうしてですか?)

(6) Pourquoi crois-tu que qu’ il soit (接続法) parti ?(P が前提、理由に焦点)

=Quelle est la raison de son départ, d’ après toi ?

(彼が出発したのはどうしてだと思いますか?)

¹ 否定文、疑問文にしても補文の内容が事実であれば、補文の内容は主張の対象ではなく、前提だと考えられる。

² 和佐（2014）はスペイン語の接続法に関して、“したがって、主節が感情・評価を表す文の従属節や el hecho de que(the fact that)節における接続法は、話し手の情報伝達に関する心的態度により選択されるもので、本来の用法が談話領域において拡張されたものであり、プロトタイプから逸脱した非プロトタイプの用法であると言えよう。また、本来、非現実の事態 (irrealis) に対して使用されるはずの接続法が現実の事態 (realis) に対しても使用可能になったのは、その本質的意味が「命題に対する真偽判断を控えるモダリティを表す」ことにある所以である。”と述べているが、同じような分析がフランス語にも当てはまる可能性が高い。

(7)³ BEAUDRICOURT, d'abord un peu interloqué, demande d'une voix négligente en se versant un gobelet de vin. Tu es une drôle de fille, c'est vrai. Pourquoi crois-tu que je suis (直説法) très intelligent ?

(ボードリクールは、まず少し当惑して、むとんちゃくな声で尋ねる、コップにワインを注ぎこみながら。君は変わった子だね、本当に。僕がとても賢いって思うのはどうして？)

JEANNE Parce que vous êtes très beau.

(だって、あなたはとてもハンサムだから)

(8) - Je le sais aussi, tu travailles tellement que tu n'as pas une minute pour penser. Pourquoi crois-tu que je t'aie (接続法) interdit de venir ici le dimanche ? Pour que ta tête se repose un jour par semaine et que ton coeur trouve une raison de battre. Mais je vois bien que Can ne te plaît pas, tu devrais le laisser tranquille.

(私はそのこともまた知っています、あなたはすごく働いていて、一分たりとも考える時間がなくて。あなたが日曜日にここに来るのを私が禁止したのは、どうしてだと思います？ 一週間に一日あなたが頭を休めて、そして心臓が波打つ理由を見つけるためです。けれども、カンがあなたの好みではないということがわかりました。)

(9) - Je vous la réserve cette place, ou non ?

- Naturellement. Pourquoi croyez-vous que je me suis (直説法) déplacé jusqu'ici ? Pour le charme de votre conversation ? Mais je voudrais être bien certain qu'il s'agit du vol de neuf heures et quart, le 11 ?

(-あなたにこの席を予約しましょうか？

-もちろん。僕がここまで移動してきたのはどうしてだと思ってるんだい？ 君との会話が魅力的だから？ でも、僕はそれが 11 日の 9 時 15 分のフライトだってことを確認したいんだけどね。)

(10) Pourquoi crois-tu que Sébastien a eu (直説法) tant de difficultés à publier sa traduction ? De Bèze a écrit à tous les imprimeurs pour le dissuader. Maintenant, ils le traitent en ennemi. Qui n'est pas entièrement avec eux est contre eux. Voilà comment ils raisonnent !

(セバスチャンが彼の翻訳を出版するのにあれだけ苦労したのはどうしてだと思う？ ドゥベーズは、彼に思いとどまらせるように、すべての印刷工に向けて手紙を書いたのよ。今や、彼らはセバスチャンを敵扱いしてるわ。彼らに完璧に従ってない人は、彼らに対立してる、彼らはそんなふうに考えてるのよ)

³ 以下の文は Frantext より採集。

(9)と(10)を説明する際に役立つのが、Birner (2004)による情報の分類である。両者ともに、従属節は意味的には旧情報でありながらも、聞き手はその存在を忘れていているように見える。つまり Discourse-new/Hearer-old の Unused な情報であるために、話し手は聴手の知識を再活性化しようとして、新情報であることを示す直説法が使われている可能性が高い。別の言い方をすれば、旧来捉えられてきた、言語レベルでの主張／前提、情報レベルでの旧情報／新情報だけでなく、聞き手レベルでの旧情報／新情報も叙法選択に影響を与えるということである。

	Hearer-old	Hearer-new
Discourse-old	Evoked	inferable
Discourse-new	Unused	Brand-new

(Birner 2004 :59)

4. 文脈の中で見る Le fait que に対する説明

ここからは後置の le fait que における叙法選択を見ていきたい。守田(2005)は「倒置されて焦点位置に入ったときには、統語的機能が主語であっても接続法の使用率が有意に高いという結果とはなっていない」と述べ、後置の le fait que における叙法選択を任意だと見なしている。だが、「話し手の想定する聞き手の知識や意識に関わる認知的な要因」(砂川 2005:259)を考慮に入れた上で、下記のように広い文脈の中から分析⁴を行うとどうだろう？

(11) Que 以下は hearer-old/discourse-new

Ces maladies ne sont pas propres à l' espèce humaine. Les animaux, -et non seulement les mammifères, mais également les oiseaux, les poissons, les insectes et les organismes vivants les plus simples , -tout comme l' homme, peuvent en être atteints. Assez fréquemment même, le microbe ou le parasite est commun à l' homme et à l' animal. Ainsi s' explique le fait que la maladie puisse (接続法) passer de l' un à l' autre. Par exemple, la rage existe chez certains animaux : chien, loup, chat, etc. Que ceux-ci, malades, viennent à mordre l' homme, et celui-ci à son tour est atteint. (これらの病気は人類に特有のものではない。動物は、一哺乳類だけではなく、同時に鳥、魚、昆虫、そしてもっとも単純な生物、一人間まったく同様、これらの病気にかかりうる。微生物あるいは寄生虫は人間や動物に共通していることがかなり多い。こうして病気が一方から他方へと移動しうることが説明される。例えば、狂犬病はある種の動物にも存在している：犬、狼、猫、などなどだ。これらの動物が病気になると人間を噛みに来て、そして今度は人間が狂犬病に感染してしまう)

⁴ (14)から(17)は守田がもともと訳していた部分は守田の訳を使い、それ以外は拙訳。また、もともと守田が取り上げていた文は四角で囲んでいる範囲。

(12) Que 以下は hearer-new/discourse-new

Vers midi, le Comité siégeait, c'est-à-dire que d'abord chacun se versait une assiette de bouillon, se coupait une tranche, et l'arrosait de bourgogne face à Paris affamé.

En 1940, dans les trous où nous étions terrés devant Gravelines, me frappait beaucoup le fait que la corvée de soupe m'apportait (直説法) chaque fois ma ration réglementaire : deux biftecks - j'étais lieutenant.

(昼頃になると、委員会が開催された、つまりまず各々が皿にスープを注ぎ、内腿肉を一切れ取り、そしてブルゴーニュワインを飲みながら食事を取った、飢えたパリの目の前で。1940 年、グラブリーヌの前で私たちが穴の中に隠れていたとき、食事係が毎回私たちに規則通りの割り当て - 2 枚のステーキを運んでくることに驚かされた。私は中尉だったのだ。)

(13) Que 以下は hearer-old/discourse-new

Je⁵ ne pensais pas du tout à lui en parlant des politiciens frustrés par le nouveau régime de leur bel avenir... Me paraît plus inquiétant, dis-je, le fait qu'il n'ait (接続法) rien tenté pour obliger Siné à rester dans un ton acceptable.

(新体制のせいで輝かしい未来を失った政治家のことを話しながら、彼のことは全く考えていなかった。シネが許される態度のままでいるようにするために彼が何もしなかったことが私には不気味だった。)

(MAURIAC Claude, Et comme l'espérance est violente, 1976, p. 273 IILAGOUTTED'OR)

以上の例からわかるように、聞き手から見た情報ステータスは接続法／直説法の選択に影響を与える可能性が高い。つまり、接続法／直説法の使い分けに影響を与える要因としては、言語レベルでの主張／前提、情報レベルでの旧情報／新情報だけでなく、聞き手レベルでの旧情報／新情報も影響を与える可能性が高い。だが一方で、どの情報が重要視されるかは、未解決のままである。

(14)は、後置されているので que 以下は共に単文レベルでは新情報である。では、なぜ第二文のみ接続法が用いられているのだろうか？ Nølke (1985)⁶によれば、聞き手は第一文の知識は共有しているが、第二文の知識は共有していないと、話し手は推測している。そして、第二文の内容は第一文と同じ理由で説明される。つまり、第二文の que 以下は、第一文と同じ理由で説明されるという意味において前提であるから接続法が用いられるということになる。このこ

⁵ ここでの私は書き手のクロード・モーリアック本人であり、聞き手は父のフランソワ・モーリアック。また、Siné はフランスの風刺漫画家のモーリス・シネであり、il はモーリス・シネとフランソワ・モーリアックが共に連載を持っていた L'Express を創刊したジャン＝ジャック・セルヴァン＝シュレーベルのこと。

⁶ なお、Nølke (1994)はポリフォニーの観点から、接続法は話者の内面化された対話であり、だからこそ、言語レベル、そして情報構造レベルの前提と接続法は関係が深いと主張している。そうした点においては、守田や和佐の主張と Nølke の主張は補完的なものだと考えられる。

とから、話し手は Birner (2004) のようなすべての要素を考慮に入れた分類を行っているのではなく、むしろその場の状況に応じて注目するポイントを変え、焦点が当たっているポイントに基づき叙法の選択を行っているという可能性が高いと考えられる。

- (14) De là vient que Daudet n' a (直説法) pas fait école : de là vient aussi qu' il plaise (接続法) à tant de lecteurs différents.

ドーデが一派をなさなかった理由はそこから来ている：また同様に、ドーデがあれ程異なる読者に好まれた理由もそこから来ている。

5. 結論

聞き手の情報処理に対する話し手の推測は直説法／接続法の叙法選択に影響を与える可能性が高い。これは、叙法を変えることで話し手に情報ステータスを伝え、より効率的な情報伝達を行おうとするという意味において、関連性に基づいていると考えられる。しかし、言語レベル、情報レベル、聞き手レベルのうち、どの情報が重視されるかは、対等ではない可能性が高い。より研究を進めることで、話し手の主観が談話構築にどのように反映されているかを明らかにする必要がある。

参考文献

- 砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点』 くろしお出版
- 目黒士門 (2000) 『現代フランス広文典』 白水社
- 守田貴弘 (2015) 「接続法の多元的拡張 Le fait que の分布と法の選択」『フランス語学の最前線 3』 ひつじ書房
- 和佐敦子 (2014) 「スペイン語におけるムードとモダリティ」『ひつじ意味論講座 3 モダリティ I : 理論と方法』 ひつじ書房
- Birner, Betty J. (2004) *Discourse functions at the periphery: noncanonical word order in English*. In Proceedings of the dislocated elements workshop, Zentrum für Allgemeine Sprachwissenschaft, Berlin, November 2003, Volume 1, ed. B. Shaer, W. Frey, and C. Maienborn, 41-62. Berlin: Zentrum für Allgemeine Sprachwissenschaft.
- Nølke, Henning (1985) Le subjonctif, fragment d' une théorie énonciative. *Langages* 80, pp. 55-70.
- Nølke, Henning (1994) La dilution linguistique des responsabilités. Essai de description polyphonique des marqueurs évidentiels il semble que et il paraît que. *Langue française* 102, pp. 84-94.
- Speber, Dan and Deirdre Wilson (1986/1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell, Oxford.